

自尊感情の2側面とその差異

—諸変数との関連を通して—

島 義弘*・田添 愛結**

(2022年11月16日 受理)

Two Sides of Self-Esteem and Differences:
Through the Relationship with Variables

SHIMA Yoshihiro and TAZOE Ayui

要約

自尊感情には「とてもよい (very good)」と「これでよい (good enough)」の2側面がある。近藤 (2010) は前者を社会的自尊感情, 後者を基本的自尊感情とした。社会的自尊感情 (Social Self-Esteem; SOSE) は他者と自分を比較してその優劣を感じ取ることで変動するものであり, 基本的自尊感情 (Basic Self-Esteem; BASE) は他者との比較に左右されない, 安定した感情である。本研究では, 自尊感情の2側面が他の変数とどのように関連するのかを検討した。先行研究に基づき, SOSE, BASEの双方または一方との関連が予測される変数として, 自己受容感, 劣等感, 自己愛 (評価過敏性, 誇大性), 主観的幸福感を取り上げた。SOSE, BASEのどちらか一方を制御変数とした偏相関分析の結果, SOSEは劣等感, 誇大性, 主観的幸福感と有意な偏相関が見られ, BASEは5変数すべてと有意な偏相関を示した。また, 偏相関係数の大きさの比較から, 自己受容感, 評価過敏性, 主観的幸福感はSOSEよりもBASEとより強く相関することが示された。以上のことから, 自尊感情の2側面の共通性と差異性が明らかになった。

キーワード : 基本的自尊感情, 社会的自尊感情, 自己受容感, 劣等感, 自己愛, 主観的幸福感

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

** 鹿児島大学 教育学部 (研究実施時)

問題と目的

自尊感情の2面性

自尊感情は自己に対する肯定的な感情であり、「とてもよい (very good)」と「これでよい (good enough)」の2側面からなっている (Rosenberg, 1965)。このうち、前者は他者と比較した際に自分の方が優れているという優越性に基づく感情であり、「随伴性自尊感情 (contingent self-esteem)」(Deci & Ryan, 1995) あるいは「社会的自尊感情 (Social Self-Esteem; SOSE)」(近藤, 2010) として概念化されている。一方、後者は他者との比較に依拠せずに生じる自己受容の感情であり、「本当の自尊感情 (true self-esteem)」(Deci & Ryan, 1995) あるいは「基本的自尊感情 (Basic Self-Esteem; BASE)」(近藤, 2010) とされている。

自尊感情という概念の提唱者である James (1892 今田訳 1992) は「自尊感情=成功/願望」という式で自尊感情の高さを表現しており、分子に相当する成功・失敗の大きさによって、自尊感情が上下する可能性を指摘している。同様に、ソシオメーター理論 (Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995) においては、自尊感情の高さは個人の社会的適応状態を表す測度と考えられており、自尊感情の低下は社会的適応における危機を知らせるシグナルとしての役割を担う。

ところで、成功・失敗によって変動するのは随伴性自尊感情 (または SOSE) であると考えられる。自分を「とてもよい」と感じること (随伴性自尊感情, SOSE) はその評価の基準が他者に委ねられており、優越性や完全性の感情とも関連していることから (河内・梶井, 2018)、他者との比較によって変動する、不安定なものであると考えられる。一方、「これでよい」の感覚 (本当の自尊感情, BASE) は本来感 (伊藤・小玉, 2005) と概念的に近く、自身に好意を抱いて尊重することであり、優越性や完全性は含まれていない。評価基準が自己に内在しているため、他者との比較に左右されない、安定した感覚であると言える。

このように、本当の自尊感情 (または BASE) は比較的安定した個人特性として長期にわたる社会的適応を保障するのに対して、随伴性自尊感情 (または SOSE) はその時々状況や成功・失敗によって変動し、現在または近い将来の行動を動機づける機能を有していると考えられる (阿部・今野, 2007; Kernis, Grannemann, & Braclay, 1989; Leary et al., 1995)。

これらの主張と同様に、近藤・山田・田淵・望月 (2014) は自尊感情が低いこと自体ではなく、その内実としての SOSE と BASE のバランスの悪さ、特に BASE の低さを問題視している。つまり、SOSE と BASE が同程度に高い状態が好ましく、SOSE が低くても BASE が高ければ許容範囲、BASE、SOSE のどちらも低い状態、あるいは BASE が低く SOSE のみが高い状態は好ましくないとしている。SOSE、BASE それぞれの性質の違いやバランスを鑑みるに、比較対象である他者によって変化してしまう SOSE よりも、他者の存在によって左右されにくい BASE を高める方が、長期的には精神的な健康により良い影響を与えられられる。

本研究では近藤 (2010) に依拠して自尊感情を SOSE と BASE の2側面で捉え、これらが以下に述べる諸変数とどのように関連するかを検討し、自尊感情の2側面の共通性と差異性を明らかにす

ることを目的とする。

自尊感情の2側面と諸変数との関連

自己受容感 Deci & Ryan (1995) に従って自尊感情を「随伴性自尊感情」と「本当の自尊感情」に分け、自己受容感と被受容感との関連を検討した石原 (2020) は、自己受容感が本当の自尊感情を高め、随伴性自尊感情を低下させることを示した。本当の自尊感情は BASE と、随伴性自尊感情は SOSE と置換可能であることを踏まえると、自己受容感は BASE とは正の、SOSE とは負の関連を示すと考えられる。

劣等感 ネガティブな反芻と劣等感・自尊感情との関連を検討した結果、劣等感が自尊感情に負の影響を与えていることが明らかにされた (森津, 2007)。このことから、劣等感は SOSE, BASE それぞれと負の関連をもつことが予想される。劣等感とは自分が他者よりも劣っているという感覚であり、自分と他者を比較してその差や相対的な位置を強く意識することで強められる (高坂, 2008)。他者という外的基準を用いて自分を評価するという性質をもつことを踏まえると、SOSE との関連がより強くなると考えられる。

自己愛 小塩 (1998) では、自己愛傾向は全体として自尊感情と正の相関関係にあることが示されている。また、誇大型 (誇大性) と過敏型 (評価過敏性) の特徴 (Table 1) からは、評価過敏性は他者評価を気にしやすく意識の対象が他者に向いているのに対して、誇大性は他者の存在をそれほど気にせず注意が自己に向きやすいと考えられる。これらのことから、評価過敏性と誇大性は SOSE と BASE それぞれと関連をもっているが、評価過敏性は外的基準に自己評価の基準が準拠している SOSE と強い関連を示し、誇大性は内的基準に自己評価の基準が準拠している BASE と強い関連を示すと予測した。

主観的幸福感 主観的幸福感とは感情状態や家族、仕事など特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範な概念であり (Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999), ある程度の時間的安定性と状況に対する一貫性をもつ (伊藤・相良・池田・川浦, 2003)。笹川 (2015) は、優越感、他者

Table 1. 誇大型と過敏型の特徴 (中山・中谷, 2006)

周囲を気にかけない自己愛的な人 (誇大型: The Oblivious Narcissist)	周囲を過剰に気にかける自己愛的な人 (過敏型: The Hypervigilant Narcissist)
1. 他の人々の反応に気づくことがない	1. 他の人々の反応に敏感である
2. 傲慢で攻撃的である	2. 抑制的で、内気で、あるいは自己消去的でさえある
3. 自己に夢中である	3. 自己よりも他の人々に注意を向ける
4. 注目の中心にいる必要がある	4. 注目の的になることを避ける
5. 「送信者であるが受信者ではない」	5. 侮辱や批判の証拠がないかどうか、注意深く他の人々に耳を傾ける
6. 明らかに、他の人々によって傷つけられたと感じることに鈍感である	6. 容易に傷つけられたという感情をもつ

Table 2. 本研究の仮説

	自己受容感	劣等感	評価過敏性	誇大性	主観的幸福感
SOSE	—	— —	— —	+	+
BASE	+	—	—	++	+

註：+は正の相関，—は負の相関を表す。記号の数の差は相関の強さの差を表す。

評価，独自性が主観的幸福感に及ぼす影響について検討した。その結果，社会的自尊感情に相当すると考えられる優越感と他者評価が主観的幸福感に影響を与えていることが示された。同様に，自尊感情が主観的幸福感に及ぼす影響について検討した石原（2020）では，社会的自尊感情に相当する優越感と基本的自尊感情に相当する本来感はそれぞれ主観的幸福感に対して正の影響を及ぼすことが示された。以上のことから，SOSE，BASE はともに主観的幸福感と正の相関があると考えられる。

以上をまとめて，Table 2 に本研究の仮説を示した。

方法

調査対象者

調査には Google フォームを用いた。Google フォームの URL を講義内で提示，または知人や友人に個人的に送付して拡散を依頼するなどして回答依頼を行った。回答における正答や誤答は存在しないこと，回答内容を研究以外の目的で使用しないこと，回答の中断が可能であり，回答しないことによる不利益は生じないことを 1 ページ目に記載し，調査協力に同意した場合に質問のページに遷移した。

最終的には 146 件の回答があったが，多重回答が 1 件あったため，2 回目の回答は除外した。145 名（男性 48 名，女性 95 名，無回答 2 名； $M = 20.71$ ， $SD = 1.29$ ）のデータについて，SOBA-SET の偏位尺度項目の合計点数が 18 点未満のものを除外し，138 名（男性 46 名，女性 90 名，無回答 2 名； $M = 20.70$ ， $SD = 1.32$ ）を分析対象とした。

調査内容

自尊感情 近藤（2013）が作成した SOBA-SET を使用した。SOBA-SET は SOSE，BASE の 2 因子各 6 項目と偏位尺度項目 6 項目の計 18 項目で構成され，偏位尺度項目の合計点数が 18 点以上であれば回答に信頼性があるとみなされる。「1=全然そう思わない」から「4=とてもそう思う」までの 4 件法で回答を求めた。

自己受容感 佐藤（2001）が分類した自己肯定に関する項目をもとに笹川（2015）が作成した 4 項目からなる自己受容尺度を使用した。「1=全然そう思わない」から「4=とてもそう思う」までの 4 件法で回答を求めた。

劣等感 YG 性格検査から森津（2007）が抜き出した劣等感に関する 10 項目を使用した。「1=いいえ」、「2=どちらでもない」、「3=はい」の 3 件法で回答を求めた。

自己愛 中山・中谷（2006）が作成した、評価過敏性自己愛を測定する 8 項目と誇大性自己愛を測定する 10 項目の計 18 項目からなる評価過敏性—誇大性自己愛尺度を使用した。「1=全くあてはまらない」から「5=とてもあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

主観的幸福感 伊藤他（2003）が作成した 15 項目からなる主観的幸福感尺度を使用した。4 件法で回答を求めた。

結果

尺度構成と記述統計

SOBA-SET の偏位尺度項目を除外した 12 項目、自己受容感 4 項目、劣等感 10 項目、評価過敏性—誇大性自己愛尺度 18 項目、主観的幸福感尺度 15 項目それぞれを先行研究に倣って因子ごとに分け、内的整合性を確認するために信頼性分析を行ったところ、全てにおいて十分に高い値が得られた ($\alpha = .70$ — $.89$)。逆転項目を処理した上で、それぞれの因子の加算平均を尺度得点とした。

各変数の記述統計と相関係数を Table 3 に示した。SOSE と BASE の間には有意な正の相関が見られた ($r = .53, p < .001$)。また、SOSE は自己受容感、誇大性、主観的幸福感との間に正の相関 ($r_s \geq .32, p_s < .001$)、劣等感、評価過敏性との間には負の相関が見られた ($r_s \leq -.29, p_s < .001$)。一方、BASE には自己受容感、誇大性、主観的幸福感との間に正の相関 ($r_s \geq .50, p_s < .001$)、劣等感、評価過敏性との間には負の相関が見られた ($r_s \leq -.47, p_s < .001$)。

SOSE, BASE と他の変数間の偏相関係数

BASE を制御変数とした際の SOSE と他の 5 変数との偏相関係数、および SOSE を制御変数とした際の BASE と他の 5 変数との偏相関係数を Table 4 に示した。SOSE と誇大性、主観的幸福感の間には有意な正の偏相関が ($r_{ps} \geq .18, p_s < .05$)、劣等感の間には有意な負の偏相関が見られた

Table 3. 各変数の平均値 (M)、標準偏差 (SD)、信頼性係数 (α) と相関係数 (r)

	M	SD	α	r						
				1	2	3	4	5	6	
1. SOSE	2.35	0.56	0.71	—						
2. BASE	2.52	0.46	0.70	.53 ***	—					
3. 自己受容感	2.93	0.73	0.87	.32 ***	.71 ***	—				
4. 劣等感	2.15	0.51	0.84	-.50 ***	-.54 ***	-.49 ***	—			
5. 評価過敏性	3.04	0.80	0.83	-.29 ***	-.47 ***	-.38 ***	.56 ***	—		
6. 誇大性	2.61	0.74	0.85	.47 ***	.50 ***	.44 ***	-.38 ***	-.02	—	
7. 主観的幸福感	2.66	0.51	0.89	.48 ***	.71 ***	.69 ***	-.58 ***	-.39 ***	.57 ***	—

*** $p < .001$

Table 4. 偏相関係数と対応のある偏相関係数の有意差検定

	偏相関係数		偏相関係数の差	
	SOSE	BASE	<i>t</i>	<i>p</i>
自己受容感	-.09	.67 **	-16.78	< .001
劣等感	-.30 **	-.38 **	1.12	.27
評価過敏性	-.06	-.39 **	4.39	< .001
誇大性	.28 **	.34 **	-0.71	.48
主観的幸福感	.18 *	.62 **	-6.96	< .001

** $p < .01$, * $p < .05$

註：SOSEとBASEの一方を制御変数として，他方と5変数の偏相関を求めた。

($r_p = -.30, p < .001$)。また，BASEと自己受容感，誇大性，主観的幸福感との間には有意な正の偏相関が ($r_{ps} \geq .34, ps < .001$)，劣等感と評価過敏性との間には有意な負の偏相関が見られた ($r_{ps} \leq -.38, ps < .001$)。

偏相関係数間の有意差検定

自己受容感，劣等感，評価過敏性，誇大性，主観的幸福感のそれぞれについて，BASEを制御した際のSOSEとの偏相関係数とSOSEを制御した際のBASEとの偏相関係数の差に有意性があるかどうかを検討するため，対応のある相関係数の間の有意差検定を行った。SOSEと諸変数との偏相関係数を r_1 ，BASEと諸変数との偏相関係数を r_2 ，SOSEとBASEの相関係数を r_3 として，用いた数式を以下に示す (iMns, 2012)。

$$A = (1 - r_1^2 - r_2^2 - r_3^3) + 2r_1r_2r_3 \quad \dots \quad (\text{式1})$$

$$t = \frac{(r_1 - r_2) \sqrt{(n-1)(1+r_3)}}{\sqrt{\frac{2A(n-1)}{(n-3)} + \frac{(r_1+r_2)^2(1-r_3)^3}{4}}} \quad \dots \quad (\text{式2})$$

得られた t 値から自由度135の t 分布における両側確率(p 値)を求めた (Table 4)。その結果，自己受容感 ($t = -16.86, p < .001$)，評価過敏性 ($t = 4.39, p < .001$)，主観的幸福感 ($t = 6.96, p < .001$)の偏相関係数の差は有意であったが，劣等感 ($t = 1.12, p = .27$)，誇大性 ($t = -0.71, p = .48$)の偏相関係数の差は有意ではなかった。

考察

本研究の結果の要約を Table 5 に示した。自尊感情の 2 側面について、一方の影響を統制した偏相関係数とその値の差の有意性を検討したところ、劣等感と誇大性は SOSE, BASE のそれぞれと同程度に有意な偏相関が得られ、主観的幸福感には SOSE, BASE のそれぞれとの偏相関が有意であり、かつ SOSE よりも BASE との関連が強かった。また、自己受容感と評価過敏性はそれぞれ BASE とのみ有意な偏相関が得られ、その差も有意であった。

Table 2 に示した仮説と比較すると、自己受容感、評価過敏性が SOSE と有意な偏相関を示さなかった点を除いて、偏相関の正負の方向性は仮説と一致した。また、偏相関係数の差の有意性については、評価過敏性は仮説とは逆に、BASE との関連の方が強かった。また、劣等感と誇大性は有差なし、主観的幸福感には BASE との関連の方が強いという点が仮説とは異なっていた。

自己受容感 自己受容感は「ありのままの自分を受け入れること」定義される（伊藤，1992）。これは他者との比較に依拠せずに生じる自己受容の感情である BASE と概念的に重なる部分が大きく（近藤，2010）、両者の間に強い関連が生じたのは必然であると考えられる。一方、石原（2020）は自己受容感が随伴性自尊感情（SOSE）を低めるとしてしたが、そのパス係数は小さく、本研究では両者の関連は有意ではなかった。自己受容の感覚は、他者との比較とは無関係に生じるものであると考えられる。

劣等感 劣等感は、SOSE, BASE のいずれとも同程度の負の偏相関を示した。劣等感とは自分が他者よりも劣っているという感覚であり、自分と他者を比較してその差や相対的な位置を強く意識することで強められるものであるが（高坂，2008）、自分よりも優位に位置する他者に理想自己を重ねたり、他者の存在は関係なしに理想自己と現実自己を比べたりすることで、理想自己と現実自己との間に差異を認知した結果、劣等感が高まることもある（中村，2016）。本研究の結果は、劣等感を生じさせる自己評価の基準は外的なものとの間の双方があり得るという知見を支持するものである。

自己愛 これまで、自己愛と自尊感情には正の相関関係があること（小塩，1998）、誇大性とは正の、評価過敏性とは負の相関関係があることが示されている（島，2019）。本研究では自尊感情を 2 側面に分けて検討したところ、先行研究と同様の傾向が認められたが、偏相関を求めたところ、SOSE と評価過敏性との間には有意な偏相関は認められなかった。

Table 5. SOSE, BASEと諸変数との関連とその差異

	自己受容感	劣等感	評価過敏性	誇大性	主観的幸福感
SOSE		—		+	+
BASE	++	—	--	+	++

註：+は正の偏相関、—は負の偏相関を表す。記号の数の差は偏相関係数の差を表す。

評価過敏性は BASE とのみ関連が見られ、SOSE との差も有意であった。この結果は、評価過敏性が SOSE とより強く関連するとした仮説に反するものである。評価過敏性は周囲を過剰に気に掛けることであるが(中山・中谷, 2006), 他者を意識することを通して、同時に他者の目に映る自分を意識することにもなる。SOSE との間に関連が認められなかった点については今後さらに検討していく必要があるが、過敏性自己愛者の無力感や傷つきやすさの背景に、「自分はこれでよい」と感じるこのできない、自己に対する基本的な信頼感の欠如が推測される。

一方、誇大性は SOSE, BASE の双方と同程度の関連を示した。誇大性には自己の完全性に対する陶醉という側面と、その裏返しとしての他者からの批判に対する防衛的反応、あるいは思い通りにならない社会からの退却という側面が含まれている。本研究の結果は、誇大性が内的、外的基準の双方と同程度に関連していることを示している。

主観的幸福感 主観的幸福感はある程度の時間的安定性と状況に対する一貫性をもつと同時に(伊藤他, 2003), 他者評価や他者からの優越性によって高まることも指摘されている(石原, 2020; 笹川, 2015)。本研究の結果は、主観的幸福感は SOSE, BASE の双方と正の偏相関があるというものであり、一方で、主観的幸福感は自身に対する根源的なポジティブ感情であり、他方で、随伴的に変動し得るものでもあるという、両知見を支持するものである。その上で、BASE の方がより強い関連を示したことから、主観的幸福感は、相対的には外的基準に拠らない、安定したものであると考えられる。

本研究の成果と今後の課題

本研究では、自尊感情を SOSE と BASE の 2 側面に分け、諸変数との関連について検討した。その結果、本研究で取り上げた変数はすべて BASE と関連するとともに、いくつかの変数は SOSE と関連していた。具体的には、自己受容感と主観的幸福感が高く、評価過敏性が低いことは BASE の高さに関連し、劣等感が低く、誇大性と主観的幸福感が高いことは SOSE と関連することが示された。これまで、自尊感情の変動性については検討されてきたが(阿部・今野, 2007; Kernis et al., 1989; Leary et al., 1995), 変化しやすい自尊感情である SOSE との関連が変数によって異なることが明らかとなった。

現在、児童生徒の自尊感情の低さが重要な教育課題の 1 つとして認識されている。ここで、内的基準に基づく、安定した自尊感情である BASE を育てるという視点と、外的基準に基づく、可変的な自尊感情である SOSE を低下させず、かつ不当に高めないという視点を共に持ち(近藤他, 2014), 成功・失敗と向き合い、向き合わせることで、自己受容感や主観的幸福感を高め、健康な自己愛を育てることが、自尊感情を育てることに資する可能性が示唆された。本研究は大学生を対象としたものであるため、児童生徒にも同様の知見が当てはまるのかや、具体的な支援、介入の方法については今後の課題としたい。

引用文献

- 阿部 美帆・今野 裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In Kernis, M. H. (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 31-49). New York, NY: Plenum Press.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin, 125*, 276-302.
- iMns (2012). 対応のある相関係数の差の検定 Deus ex machina な日々 Retrieved from <https://imnstir.blogspot.com/2012/09/blog-post.html>. (2021.12.20)
- 石原 由梨奈 (2020). 受容的認知及び自尊感情が主観的幸福感に及ぼす影響—自尊感情の随伴性に注目して— 甲南女子大学大学院論集, 18, 23-32.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤 美奈子 (1992). 自己受容感を規定する理想—現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 164-169.
- 伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子・川浦 康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- James, W. (1892). *Psychology: Briefer course*. London: Macmillan.
(ジェームズ, W. 今田 寛 (訳) (1992). 心理学 (上) 岩波文庫)
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 1013-1022.
- 河内 歩美・梶井 芳明 (2018). 自尊感情の向上に向けた教育的取り組み—自己評価・他者評価と Q-U との関連から— 東京学芸大学紀要 (総合教育科学系 I), 69, 155-167.
- 近藤 卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践— 金子書房
- 近藤 卓 (2013). 子どもの自尊感情をどう育てるか—そばセット (SOBA-SET) で自尊感情を測る— ほんの森出版
- 近藤 卓・山田 由美子・田淵 愛子・望月 美紗子 (2014). 基本的自尊感情理解のための小中学生用教材の開発—フェルト製教材の作成と期待される効果— 山陽論叢 (山陽学園大学), 21, 159-164.
- 高坂 康雅 (2008). 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化 教育心理学研究, 56, 218-229.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology, 68*, 518-530.
- 森津 誠 (2007). 学生のネガティブな反すうと劣等感および自尊心との関係—「やる気」理解のための一考察— 国際研究論叢 (大阪国際大学), 20, 63-70.

- 中村 純子 (2016). 理想自己と現実自己の差異と自己注目が劣等感に与える影響 人間生活文化研究 (大妻女子大学), 26, 168-172.
- 中山 留美子・中谷 素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 笹川 果央理 (2015). 自尊感情が主観的幸福感へ及ぼす影響の検討—自己価値の随伴性からの整理— パーソナリティ研究, 24, 112-123.
- 佐藤 純 (2001). 名前の自己評価と自己受容感の関係 日本性格心理学会第 10 回発表論文集, 124-125.
- 島 義弘 (2019). “キャラ”の有無およびその受け止め方と大学生の自己—自尊感情, アイデンティティ, 自己愛に着目して— 鹿児島大学教育学部紀要 (人文・社会科学編), 70, 121-132.

付記

本論文は、第2著者が鹿児島大学教育学部に提出した令和3年度卒業論文の一部を再構成したものである。研究にご協力いただいた皆様に感謝いたします。